



Title	対人コミュニケーションにおける非言語行動の2者間相互影響に関する研究
Author(s)	長岡, 千賀
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44836
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 ^{なが}長 ^{おか}岡 ^ち千 ^か賀

博士の専攻分野の名称 博 士 (人間科学)

学 位 記 番 号 第 18334 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 16 年 3 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第1項該当

人間科学研究科人間科学専攻

学 位 論 文 名 対人コミュニケーションにおける非言語行動の2者間相互影響に関する研究

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 中村 敏枝

(副査)

教 授 大坊 郁夫 助教授 狩野 裕

論 文 内 容 の 要 旨

相互作用相手との間でコミュニケーション行動が連動し、パターンが類似化していくことを同調傾向と呼ぶ。同調傾向は非常に多彩な非言語行動に観察される現象であり、また、多彩な学問分野でさまざまな関心から個別に研究が行われてきた。本研究では、交替潜時（話者交替の時間間隔、すなわち、一方の話者が発話を終了してから他方の話者が発話開始するまでの時間の長さ）をパラメータとして、同調傾向のモデルを構築することを目的とする。

まず第2章では、対話実験や模擬対話実験によって、発言行動の時間特性の同調傾向に関わる要因を特定し、同調傾向の生起過程を明らかにした。実験結果から、交替潜時の同調傾向に、相手に対する構えの要因や記号化スキルが影響することが示された。ならびに、交替潜時の同調傾向は、時間経過に伴って徐々に程度を増すことが観察された。

第3章では、評価実験によって、発言行動の時間特性の同調傾向の機能を明らかにすることを目的とした。実験結果から、交替潜時が同調傾向を示している場合の方が同調傾向を示していない場合よりも、話し合いによって目標達成しやすいと感じられることが示された。同様に、交替潜時の同調傾向を示す話者の方が、同調傾向を示さない話者よりも、より親しみやすく感じがよいと評価されることが示された。

実験結果を基にして、交替潜時の同調傾向を説明するモデルを提案した。このモデルにおいては、話者たちは相手の発話様式を相互に参照し自分の発話様式として取り入れる。そして、この過程の中で、相手に対する構えや社会的スキルが影響すると考えられる。また、同調傾向は、受け手に、話者の相手に対する態度を伝達する機能がある。

また従来、同調傾向のモデルとして作られてきた、Hess ら (1999) や Giles ら (1979) のモデルを概観するとともに、本研究で提案したモデルと対比を行った。これにより、各モデルが説明対象とする領域を明確にし、さらに各モデルが説明対象とする同調傾向の特質を対比させることにより、同調傾向の俯瞰を行った。この過程で、俯瞰の視点として2つの視点を提案した。同調傾向を俯瞰するための視点とは、第1に、Hess ら (1999) が説明対象とする情動的・自動的な同調傾向と、本モデルが説明対象とする社会認知的な同調傾向とを峻別する視点、第2の視点は、Giles ら (1979) が説明対象とする社会歴史的な文脈を参照して起こる同調傾向と、本モデルが説明対象とする相手の非言語行動を参照して起こる同調傾向とを峻別する視点である。同調傾向を俯瞰するための視点を提供したことは、本研究の意義であるといえることができる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、コミュニケーション場面における非言語行動の対人相互影響について、同調傾向の側面から検討したものである。同調傾向はさまざまなコミュニケーション・チャンネルで観察されているが、本論文では、交替潜時、すなわち2人の対話者の発話交替によってできる「間」の長さを切り口としている。

本論文の第1章は多分野にまたがる先行研究の幅広いレビューである。第2、3章はそれぞれ、交替潜時の同調傾向にかかわる要因と時間的生起過程、および、交替潜時の同調傾向がもたらす影響について実験研究による検討を行っている。実験手法を巧妙に工夫することにより、同調傾向が時系列的に徐々に生起する過程、ならびに、交替潜時の同調傾向が対話の目標達成を促進し個人的な親しみやすさをもたらすことを示すことに成功した。さらに第4章では、第2・3章で得られた知見を総合して、発話様式の同調傾向の新しいモデルを構築することを試みている。従来提出されてきた複数のモデルと対比させることにより、それぞれのモデルが扱う同調傾向の特質を明確化し、さらには同調傾向を俯瞰するための視点を提案した。同調傾向は、従来多様な学問分野で個別に研究され、また、多種多様な現象で示されてきたが、それらを総合的に論じるための視点を提案したことは、同調傾向研究に対する重要な貢献と認められる。

以上、本論文は、理論的展開の明晰性、実験手法の斬新さ、ならびに、データ分析の緻密さにより、優れたものと認められ、博士（人間科学）の学位の授与に十分に値するものであると判定された。